

ある幼稚園

明かるい秋のある日、私はごく標準的な都内のある公立幼稚園を参観した。

この幼稚園は、明治年代の創立であるから、すでに久しい歴史をもっている。創立当時は小学校の付属であったし、場所も小学校と近いので、小学校への連絡は非常に密接のようである。とにかく伝統が相当なものであるから同一区内の子どもだけ、と募集はするものの、あとになって他区よりの通園幼児もしばしば発見されるほどだとのことである。

この幼稚園は、敷地約二百坪、二階建て、総建坪約百四十坪、遊園約八十坪という、まことにこじんまりした幼稚園である。遊園には、樹木は数えるほどしかなく、簡易舗装がされている。そしてここには、二年

保育児が各々四十名ずつ二クラス、一年保

育児が三クラス、合計五クラス約二百十名が通園している。次に園児の環境をみると、会社員が最も多く、ついで商家の子どもが約三分の一で、あとは医師、寺の住職の子どもなどが比較的目的立つ程度である。

地域は下町に属するけれども、昔から教育に対しては熱心な家庭が多く、前述したごとく、古い伝統を有することからわざわざここをえらぶ父兄もいるのである。このような外観から言うと、世間一般の幼稚園よりは、よほど恵まれているし、うらやましく思う幼稚園の先生もあるにちがいない。が、よく見ると、実に不思議なことが眼につくのである。ここは公立、つまり公費でまかなわれ、直接教育委員会の監督のもと

にあるのであるが、設置基準ぎりぎりに合うようにされていることである。建築法規にはもちろんかなっている。しかし園舎としては、本当に無理をしているようである。聞くところによれば、予算の都合で、

そこ、ここと削られて、最初の設計からはだいぶ変わってしまったものらしい。子どもたちの生活の場である幼稚園の建物が、予算のために容易に変更されてしまい、幼稚園設置基準ぎりぎりの線でようやく建築されたわけである。

そういえば、これとは対象的な幼稚園があった。ある地方の都市のことであるが、莫大な費用をかけて、たいへん立派な公立の園舎を建築した。そこには参観者がひきもきらぬほどであった。だがしかし、この中で暮す子どもたちはどうであろう。なるほどその建物は非常によくできていて、設備も申しぶんない。そのせいたくさは誰もが羨むほどである。けれどもその立派さも、単に建築上の立派さだけであって、幼

「既がもっとも暮しよいように考えられた建物だとは思われないのである。同じ費用をかけるのに、現場の長年の経験者の意見を、より多くとり入れないで、あまりにも建築に重点をおきすぎた結果であろう。この傾向は、公立園においてとかく見られがちである。公立においては、園の先生がたの経験はほんの参考にしかならないからでもある。

さて話をもとにもどして、この幼稚園ではやむをえぬ事情で、二階を年長児クラスが使用している。そして園児のための手洗いや、水道、窓のふちの金網は用意されている。でも子どもが階上にひとりでもいるときは、先生は心配で他の子どもと階下にいくこともできない。そこで遊園に出るときは、子どもたち全部を連れておりるとのことであった。先生がたの神経はそのたびによい費される。子どもたちをのびのびと育てるには、保育室から直接遊園に出ることができ、先生が室内に屋外にと、絶

えず目が届くように考慮された建物がよいことはいうまでもない。とはいっても、敷地の拡張がむずかしいことであれば、今後はやむをえず、ますます階上を使用する機会が多くなることであろう。そういう場合には、子どものためには不便のないよう、何はともあれ最大の工夫をし、綿密な配慮を施せるように準備がされなければならぬ。

さらにこの二階についていえば、本来は研修室であつて保育室用に設計したものでなかつたために、保育室としては何となくうす暗い感じのする室があつた。この室には四十名ほどの園児が、これから電車ごっこをするので、自由あそびをしながら大工仕事をしていた。ノコギリを使うのは先生がうけもち、子どもたちはカナヅチでたたく。とても楽しそうである。この子どもたちのために、もう少し広い面積と、あかるい光をじゅうぶんにあげることができたならば、と思わずにはいられなかつた。

次に経営の面をみると、ここには年間八万円の予算が区から支出されている。父兄よりは毎月保育料五百円の他、PTA会費四百円を徴取するので、年間八万円と、月々四百円のPTA会費がこの園の経費となつている。これだけの費用は、先生がたの研究費にわずか、その他大部分が毎日の子どもたちの消耗品につかわれている。この子どもたちは、消耗品例えば、絵具はふんだんに使うことができることになつていのである。そのかわり、備品まではなかなかまわらないようである。そして、この備品までは手がまわらないということ、敷地が狭いということの二つのために、各保育室共有の遊具が多くなつている。子ども自身が簡単に運ぶことができるように、箱の下には車をつけて、子どもたちが好きな時、好きな場所に移動して遊ぶことができるようにされている。大きな箱積木や、マットレスなどは、必要なとき戸棚から出して使い、すめば戸棚にしまふよう習慣づ

けられている。遊具は目につく場所においてあって、ほしいときつねに自由に使えるのならば、たいへんよいと思われる。

このように理想の面積をもたないことと、予算との問題が複雑にからみ合っており、保育の方法が制約されている。にもかかわらず、備えられたあるものを、少しでもよく活用しようと工夫をこらしている。——これがこの幼稚園である。

そしてこの先生がたは、毎週水曜日は研究会を開いているという。まじめで実に熱心である。一般の幼稚園と比較したならば、たしかによいといわなければならぬ。しかしもしもこの不便な現状になれてしまつて、もうこれ以上の発展は期しがたいとあきらめてしまったならば、どういふことになるのだろうか。道具はこれだけしかないから、先生のいうとおりにやればよい。何でも、とにかく先生のいうとおりにお行儀よく、などというのでは、子どもたちは不幸である。子どもと先生の話しかけ

が比較的少なくすむから、先生はらくであるかもしれないが、しかし問題はそれにとどまらず、子ども同志の話し合いも次第に少なくなり、子どものいのちともいふべき活潑さは、次第に失なわれていくことになるであろう。例えば紙芝居をつくる場合、先生の方から材料を与える。子どもは真面目にそして楽しそうに描く。すると先生はそれでよいのだと考へてしまいがちである。自由にえらべるような条件がまわりになく、固定した方向にむけられてしまうのでは、この時期にどんだんのびていく創造力の芽は、つみとられてしまうのである。同じ形、同じ色の電車の絵をいつも描いていたのでは、個性豊かな発達をすることができないのである。同じところに指導者が安住しているようではない。

とにかく、子どもは変化がほしいのである。そして、先生は子どもの気持になつて一しよに遊んでやらなければいけない。子

どもの中にあるものをひき出していきたい。先生が与えるものは、子どもの力をはたす道具として使いたいのである。保育者の知恵の働かしようで、子どもはどんなふうにも成長していくことであろう。無心に遊ぶ子どもたちを見ていて、ふつうおとなのいういわゆる「よい子」なるものの概念を、少し考えなおしてみるべきではなからうか。

ふと足もとに気がつくとき、先生と子どもたちは、同じうわ靴を使用していた。園長先生だけは別であった。「見本がきたのでどんな具合かと私がつまっています、むしろ今までのものより使いようなので、他の先生がたにもためしていただいて、今使っている靴がすりきれてしまつたら、今度はこれを求めるようにしようと思えますよ。」長い間、園児とともに暮らしてこられた園長さんの、ほのぼのとあたたかな心の中に見える思いで、感謝しながらおいとまをしたのであった。

(一参観者)